

記録「シャーマニズム研究から歌の人間学へ―痛みを聴く耳を育む試み」※

※ワークショップは主催者側が勝手につけた「歌の人間学とコンフリクト～コール&レスポンスから」なる名をもっていたが、佐藤さんが用意したレジュメのこのタイトルをもって記録するのが適切だろう。

佐藤壮広さんといえば、「教壇でギターを抱えて熱唱。学生にも自分の心を見つめた歌詞をつくってもら。異色の授業が好評だ」(『朝日新聞』2009年2月14日付朝刊)といった感じで、「流しの講師」として最近注目を集めているのだが、ワークショップでやってもらいたいと思ったのは、そういうことではなかった。いや、たしかにそういうこともやってほしかったのだが、そういうことだけではなかったのだ。佐藤さんには、沖縄のシャーマニズム研究者というもうひとつの顔があり、僕が個人的に見知っている佐藤さんはそちらのほうの佐藤さんであった。ユタと呼ばれる民間巫者の語りや実践を紹介しつつ、彼は沖縄戦死者の「痛み」を感受する巫者の身体、そしてその語りを正面から受け止めた新たな平和運動ないし「巫者の平和学」の立ち上げを提起し、そのための作法を模索しているようだった。

僕は歌う佐藤さんの姿を見たことがなかったから、上の新聞記事などを読んで想像していただけたことなのだが、彼のシャーマニズム研究と、大学の教室で彼が実践しつつある「歌の人間学」とが、深いところで共振しあう関係性をもっているに違いないという感じを抱いていた。巫者ならざる僕(たち)が、他者の「痛み」を感受するためには、なんらかの方途が必要となるだろう。湾岸戦争を舞台としたロバート・ウェストールの『弟の戦争』に言及しながら川村邦光がいうように、僕(たち)は「霊を感応する力も、あるいは繊細な感受性も」もちえないとしても、感応する身体の「傍らに寄り添い、ひたすら聞き想像すること」は可能かもしれない(川村邦光「はじめに」川村編『戦死者のゆくえ』青弓社、2003年)。とはいえ「聞き想像すること」は、じつはそれほど容易なことではないようにも思われる。あるいは佐藤さんは、歌の人間学の実践を通じて、その糸口をつかみつつあるのかもしれない。もしそうであるなら、その糸口をぜひとも共有させていただきたい、というのが今回のワークショップの企画意図だった。

ワークショップは、「非常勤ブルース」から始まった。日々、非常勤講師として受講生たちと対面するなかで投げかけられる、「先生いつも どこにいるんですか?」という言葉。答えに窮し、学生にボヤいたりお茶を濁したりする三年間を経て、佐藤さんが出した結論が、「おれはいつも お前らの目の前だ」というものだった。という歌だ。佐藤さんによれば、ブルースの基本的な形式は、同じフレーズを2回繰り返し⇒3連目で“オチ”をつけるというものである。すなわち、最初のフレーズでは状況との対峙、向かい合いが行われ(先生いつも どこにいるんですか?)、最後のオチでその状況への即応、ふるまい方が語られるという(おれはいつも お前らの目の前だ)。共同体もしくは社会のなかで共有され

たこの形式に乗ることによって、“佐藤さんを取り巻く状況”は必ずしも佐藤さんのみのものではなく、聞く者にとっても対峙すべき状況として立ち現れるかもしれない。それは彼の状況と聞く者の状況がリアルにリンクするからかもしれないが、べつに非常勤講師でなくても、大学院生でも、学部学生でも、会社員でも、たぶん専任教員であっても、それぞれの立場から対峙すべき状況として感知することは可能だろう。歌にせずにふつうに「おれはいつも お前らの目の前だ」といってもべつにかまわないわけだが、それで佐藤さんがそのせりふを確信とともにいい続けられるか、またこのような形でワークショップを開いてもらうことになったかどうか。歌の形式がもつ力というものが、そこにはたしかにあるのだ。

しかし、佐藤さんが強調するのは、ブルースを「聴く」だけでは充分ではなく、応答、レスポンスが重要だということだ。つまり「非常勤ブルース」の場合であれば、サビで佐藤さんが「非常勤ブルース！」とシャウトすれば、僕たちオーディエンスも「非常勤ブルース！」と応答する。開始早々で、照れが先立つ僕たちのレスポンスは相当情けないものであったが、このレスポンスの意味については、後述する。

この「非常勤ブルース」は、新学期最初の授業で、学生たちに対して歌われるのだという。労働問題とか格差社会とか、社会問題といわれるものが、大学の外で・大学とは無関係に存在しているものではなく、大学の門の中にあるのだということを伝えるすぐれたメディアが、非常勤講師としての佐藤さんの身体であり、「非常勤ブルース」なのだ。

彼のレクチャーでとても魅力的だったのは、沖縄シャーマニズムの人類学的調査から、歌の人間学に向かってじりじりと、少しずつ接近していく、その持続的なプロセスである。1997年から99年にかけて沖縄で調査を行った佐藤さんが大事にしてきた問いは、死んだ人の声を聴くユタの話をどのように受け止めるべきか、ということだ。沖縄をめぐる基地反対運動や平和運動は、これまで生者の論理のみによって問題を構成してきたため、“死”や“死者”はいつも論点からこぼれ落ちてきた。しかしそのように生の次元だけを肥大化させてきた知のあり方は、「自分の死にも他者の死や痛みにも鈍感」であり、「暴力の発生に対しても抑止とならない、あまりにも貧弱な知」なのだと言った佐藤さんはいふ（「ヌジファの拝みと平和の知」『琉球新報』2006年6月23日）。だからこそ、死者を感受するユタの声に耳を傾けることが、平和を創造する知を深めるために必要なのだと。僕がはじめて佐藤さんに出会ったのは、おそらくこのころだ。

だが、佐藤さんによれば、そんなふうについて満足してしまっただめなのである。問題は、死者のように、声をあげることのできない人の声を聴く（あるいはそのように語る人の声を聴く）、そのための心身を僕たちがどのように作りあげていくか、という点にある。僕たちが近代的な知の枠組みに骨がらみになり、それに寄りかかって生を組み立てている以上、死者の声を聴くなどといったことを真摯に受け止めることはなかなか容易なことではないだろう。保莉実がいったように、「世俗主義の問題となると、みんな腰が引けま

すよね」(保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』お茶の水書房、2004年)。たとえば歴史学の論文に死者を登場させたりすれば、それきりまともな研究者としてみてもらえなくなるかもしれない。「私のインフォーマントは死者の声が聴こえるといっている。それは客観的な事実ではないけれども、彼女にとっての“現実”として、私は喜んで尊重したい」といいつつ、死者の声そのものに直面することをなんとか回避するのが、せいぜいのところだろう。「世俗主義を超える、つまり精霊とか神様とかの世界を、僕たちがもう一回リアルに引き受けることが、アカデミズム、あるいはもうちょっと広く、公共性という枠組みの中で果たして可能なのかどうかという問題。これ、もしかしたら、僕らに突き付けられている、とつても大きな課題であるというふうに思います」(同上)という保莉の問題提起は、おそらく佐藤さんも同意するところだと思う。

それは率直に言ってきわめて巨大で厄介な問題だが、佐藤さんは佐藤さんなりの模索を続けていく。ユタの女性たちが御願所に集まって、自身の苦悩や葛藤を語りあう場に彼は立ち会っている。その語りの場は、ときとして彼女たちの苦悩を託した琉歌(沖縄の八・八・八・六のリズムをもつ定型歌)が歌われる場へと変容することがあり、それに同行の仲間がじっと耳を傾け、頷いたり、リズムに合わせて呼応したりするのだという。はじめビデオ記録をとっていた佐藤さんも、やがてカメラを置き、目を閉じて聴くようになった。そこには、「痛みの声を聴く」共同体ができあがっていたのである(「共苦のスピリチュアリティ」『古代文学』48号、2009年)。こうした場にかぎらず、ユタはクライアントの悩みを聴く際にも、頷き、相槌を打つ。それはたんなる形式的な相槌ではなく、相手の世界観を共有して話を聴きとった上での応答であるというのが、佐藤さんのいうところだ。歌の人間学の核心はコール&レスポンスにあるというのが、その原風景は、ユタがクライアントの、仲間たちの、そして死者たちの声に耳を傾け、応答する姿勢に求めることができるだろう。言語化への試みを放棄したわけではないが、佐藤さんはまず、コール&レスポンスという実践のなかに、他者の「痛み」を感受する心身を構築していく可能性を見いだすのである。

ところで、ワークショップに先立って佐藤さんの論文(「『巫者の平和学』試論—死者の感受と沖縄からの平和祈念」『平和研究』32号、2007年)を読む会を開いたのだが、そこに気になる図があった。沖縄本島周辺の地図に、人の体が重ね合わせるように描き込まれている。佐藤さんが出会ったユタの女性は、自らの身体の痛みをシマの痛みと重ね合わせて理解しており、シマの“背骨”に打ち込まれた杭のような米軍基地の重圧に苦しむ沖縄社会の痛みが、彼女の痛みをもたらしているという。それを図にしたものなのだ。この奇妙な図が何を意味するのか、僕はいつもの癖(?)で、佐藤さんによる本文記述に答えを求めていた。それを読めば、上のようなさしあたりの理解は得られる。だが、そういうことなのか?たしかにそういうことなのだが、それには還元しえない次元があるのではないか、とも感じられた。とはいえ、本文と図を相互参照することでは、それ以上の理解にはいたらなかったので、そのまま放りだしてワークショップを迎えていた。

佐藤さんは、「シマの痛み」「沖縄の痛み」といったことがさかんに語られている、基地反対運動や平和運動の言説空間のなかにこの図を差し出し、1分か2分、この図についてどう考え、語るべきなのか、といったことについて思いをめぐらしてみることが重要なのだという。この図をどのように受け止めるかは、世俗主義化された近代の知の枠組みをラディカルに問い直すものでもある。シマの痛みと個人の背中の痛みがつながっているという“怪しげな話”を、真摯に聴くことができるかどうか。「僕はこの痛みを知りたいと思って、少なくとも知れたらいいし、そういうふうなことを語る人の言葉を聴いてしまったので、変と思われようが何といわれようが、こういうような人がいましたよというようなことは、話をしなくちゃいけないし、さまざまな分野のところで、これをどう考えるのかということ、議論してみたい」と佐藤さんはいふ。ここにも、彼の聴き、応答しようとする姿勢があるといえようか。

1分か2分、図をみて考えてみる、ということが僕には印象深く思われた。つまりさきほどのべた僕の見方、読み方はなにか根本的に、違っていたようなのだ。本文の説明を性急に求めるのではなく、図に見入る時間をつくってみる。それは相手に（この場合は図か）自分を空け渡してみる時間をつくることといえるのかもしれないが、そういった時間が、「聴く」ことには不可欠なのかもしれない、と思われた。図の“意味”はまだ、相変わらずわからないのだが（念のために付け加えれば、「聴く」とは聴覚で感知することに限定するべきではないだろう。『聞くこととしての歴史』（名古屋大学出版会、2005年）において大橋良介がいうように、「語る」と「聞く」とは「対の作用関係にある」から、事物を語るということに先立つ「純粹経験」（西田幾多郎）として、まずその事物に「聞き入る」ことが想定される。そうであれば、図や、文字の語りを「聴く」という経験も承認されるだろう。「見る」という動詞によって「聴く」とこととの相違をことさらに強調する必要は、少なくともここにはない）。

さて、歌の人間学ワークショップである。最初に登場したのは、エッグシェイカーという、小さなタマゴ型のマラカスといった趣の楽器だ。使い方は簡単で、手に持って振ったり叩いたりすれば、シャカシャカ音が鳴る。これをひとり一つずつ持って、隣り合った人と二人ひと組になる。それから、相手の音を①聴く。②ふたりで合わせてみる。③ふたりでアンサンブルを作ってみる。④参加者全員でアンサンブルを作ってみる。

また性急にことばでまとめてしまうことになるが、これは他者の声を聴き、応答するということを、きわめてシンプルな形で表現したものだと思う。もちろん言葉を使って呼びかけ→応答することはできるが、僕たちの言葉はあまりにも複雑なもの（たとえば秩序、制度、ジェンダー、エスニシティ、などといった）を積み込みすぎている。それに比べれば、シャカシャカする音は、よほどシンプルで、原初的なコール&レスポンスの形をしているといえる。こういうと、“音”をナイーブに理想化しすぎているといわれるかもしれないが、——たしかにそうかもしれない——少なくとも日常的な思考の習慣を、いったんと

きほぐしてみることに効果があるだろう。しかし、これ以上余計な言葉を重ねるのはやめて、参加者の感想をひとつ引いておこう。

人の音を聴くっていうとても単純で誰でもわかるようなことから入って行って、学生とか、全然経験がない人でも、その人のレベルで注意をそちらに向けて聴く耳を育てることが体験してよくわかったし、体験してはじめてそれがすごく楽しいってということがわかるんです。学生で自閉的になっている子が多いから、人のこと聞いてないんです、自分の問題でいっぱい。でもこういう楽しい経験から、(隣の人と) やってもうお友達になっちゃったような感じなんです、恋人どうしとかでやってみたらいいだろうな、と思いました。

もうひとつの試みは「自分詞」をつくることである。ブルースの型式に、自分なりの苦悩や痛みを、詞にしてみる。自分なりの状況への対峙と、それへの即応を詞に乗せてみる。それに佐藤さんが曲をつけ、歌う。さきほどのべたように、ブルースは自分の状況と向き合こと、自分と対話することにも使えるが、誰かに自分の状況をわかってもらったり、その自分のコールに対するレスポンスを引き出すこともできる形式をもっている。僕もそれなりに切実な状況について書いてはみたが、どうも長大すぎて、残念ながらブルースにはならなかった。やはりここでも、首尾よく書きあげて、「自分詞」が歌になる現場に立ち会ったひとりの参加者の声を引いておこう。

得がたい体験です。自分が書いた文章が、その場で歌われる。それは生まれて初めてのことだったので、すごく今、何が起きたんだろうかと考えていて。たしかにつけ加わったわけですね(佐藤さんは、詞を歌に乗せて歌うときに、新たなフレーズを自分で付け加えていた)。お話を聞いているときにすごく大事な言葉だと思って書き記していた言葉が、「相槌を打つ」ってということをおっしゃっていて、それは頭では分かっているわけです。「傍らにいる」っていうんじゃないくて、「相槌を打つ」なんだと思って、頭では分かって。でもこの歌詞を書いたときには、なかなか、最初は(歌詞のなかの)「酒を飲む」もなかったんです。「ただいるだけ」って。でもそれはつながっていないんですよね。つながらなかった。で、とりあえず、「酒を飲む、かな」というところまではあるんだけど、そこで、「頷くだけ」ってつけ加わったときに、佐藤さんに付け加えてもらったと同時に、自分の中で、メモでは頷くのが大事だって書いてあるんだけどそれが、べつの形になって、そう、頷けた。かどうかもまだ分からないけど、なんかその増殖感っていうかな、歌の中で、それはおそらく私一人でもなければ佐藤さんが勝手に付け加えたのでもない、……面白い！

佐藤さんのセミナーは、僕にとっても「面白い！」ものであったし、その体験は咀嚼し

きれないまま、今も僕のなかに残っているのだが、最後に佐藤さんに不粋な問いを投げかけてみたかった。それはあの、身体の痛みとシマの痛みを重ね合わせた図に関するものだ。

1、2分図に見入ってみろ、という佐藤さんの言葉は僕にとってとても腑に落ちるものだった。「聴く」とはそういうことなのかと。では、しかし、それはどのように語りうるものなのだろうか。論文とか、エッセイでもいいのだが、なにか散文的な言葉で、それを語ることはできるのだろうか。無用の誤解を避けるためにいっておくが、僕は論文のなかで語りえないものを否定しようとしていっているのではない。論文がそれほど立派なものだとは、毛頭思っていない。しかし、かといってそれほどくだらないものだとも思っていない。僕が日々、散文的な文体で読み、書いているのは、絵が描けなかったり楽器ができなかったりするからではなく（実際に絵も楽器もできないのだが）、その表現形式になにほどこかの可能性をみているからであり、自分がその表現形式とともにどこまで行くことができるのか、それを見きわめてみたいのだ。だから、僕の質問はこうである。あの図を言語化することが、少なくともとても困難であることはよくわかる。しかし、将来的な展望として、散文的な文体を通じて図の語りに接近することは可能なか。それとも不可能なのだろうか。

僕自身はまだ結論を出そうという気にはなっていないが、この小文の最後に、佐藤さんのレスポンスを書き留めておこう。

自分の中では、「じゃあお前は見たり聞いたりできるのか、死んだ人のことを」っていうと、いや、できません。でも、死んだ人と今でもコミュニケーション、カッコつきだけど、交流して戦後数十年過ごしている沖縄の文化あるいはその中に生きる人たちがいる、それを見てきたんだということを、手放さずに、沖縄の問題とか沖縄社会論とか、沖縄の表象の問題っていうのを考えていきたいと思うんですよ。そうなったときに、見えないんじゃあ、いってることだってウソなのっていわれるんだけど、そういうときに、少なくともじゃあ、「悪い、俺の授業見てくれ」と。あそこで学んだことは、たしかに近代的なロジックの先とかそれを乗り越えるということは、アカデミアでは難しいかもしれないけど、でも、授業っていう場を通してだったら、少しは、それをずらしながら、メッセージをこんなふうに僕はフィルターを通して展開しましたってところまではいえるだろうなっていう意識があって、今やってるところなんです

(文責：永岡崇)